様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２７５７

研究課題名（和文）習得過程に着目した文法理論による意味的弱動詞の特性の説明

研究課題名（英文）Toward an explanation of the properties of semantically light verbs in terms of a process-oriented theory of grammar

研究代表者
鈴木　猛（SUZUKI, Takeru）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：００１８７７４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最も重要なデータ分析の成果は次のようにまとめられる。(1) PathPPが、獲得最初期から動詞なしで頻出し、述語として位置変化を表す。関連発話の大半は物を移動させてという依頼で、使役が潜在する。動詞は後から現れ、意味的弱動詞put, take, turn等から始まるが、位置変化の意味には貢献しない。続いて、様態動詞（pull it away, throw it downなど）、さらに、need, wantが現れる。(2) 獲得初期のPathPの大多数がtelicで（in, on, offなど）、atelicのaround, alongなどは多くなく、現れる場合も動詞と共起して副詞的。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、まず移動に関するV＋DP＋Prt/PathPP の構文に関して、CHILDESのデータに基づいて、一般性が高い獲得順序を明らかにした。類型論的にも、言語におけるPathPの有無・PathPの獲得順序からLexical Subordination (Levin and Rapoport 1988)とsatellite-framing of Path (Talmy 1985他) が説明される可能性を示した。また、V-DP-PrtとV-Prt-DP (句動詞) は似ていることから学校で一緒に教えられることがあるが、後者は、獲得初期にはほとんど現れないなど、重要な違いを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has the following crucial findings. (1) PathPPs appear frequently and without any cooccurring verb at the very early stages of language acquisition and later. As such, PathPPs function as predicates that express change of location. Most of the relevant utterances are requests to move something and thus are implicitly causative. Verbs appear later than PathPPs. The first verbs that appear with PathPPs are semantically light verbs such as put, take, turn, and so on. They do not directly contribute to the meaning of change of location. The next verbs that appear are manner verbs such as those in pull it away and throw it down. The third verbs are need, want and the like. (2) Most of the first PathP that appear are telic (in, on, off, etc.). Atelic ones such as around and along are infrequent and, if any, are adverbial modifiers of verbs, not predicates.

研究分野：英語学　生成文法理論

キーワード：Semantically light verbs　Path prepositions　Particles　Satellite-/verb-framed　Lexical Subordination　Process-oriented　Developmental

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

John put the box on the desk の put を例に取ると、いくつかの注目すべき特性がある。

(1)意味的に弱い(semantically weak; Ritter and Rosen 1996)、すなわち、特定的な意味を持たず、多様な具体的意味で使われる(例：put his tie straight, put it in another way)。

(2)補部を２つ取る。

(3)２つの補部は基本的にどちらも義務的で省略できない。

(4)日本語で対応する動詞「置く」は意味的に弱くない（非常に特定的な意味を持つごく一般的な語彙動詞である；put の上例は最初の例しか「置く」で訳せない）。

意味的弱動詞には、使われているうちに意味が薄くなっていく場合(semantic bleaching)が一つのタイプとしてあるが（例えば Onoe and Suzuki 2002 を参照）、put は習得最初期から意味的に弱く、このタイプとは考えられない。今の理論では put はこういう特徴を持つと指定するしかなく、原理的な説明がない。

視点を変え習得過程に目をやると、関連すると思われる現象が観察される。Tomasello (1992) によると、英語の習得過程において、場所・経路を表す前置詞句（目的語を取らないパーティクルを含む）は述語としてかなり早い段階で使われはじめる(例：Crayon up here. Towel down. Grover on there: [NP PP]という動詞のない節的要素（＝小節）として)。大人の文法からすると動詞がなく文になっていないのだが、要求等限られた意味のみ表現する段階では、このままで完成している（あまり論じられたことはないが、じつは大人もこの表現形式を使う場合が多々ある；鈴木 2011）。Tomasello は [NP PP]と[Vsw NP PP](Vsw＝semantically weak verb)の相関関係に特別注目していないのだが、扱われているデータを見る限り put のような動詞は、先に習得されている[NP PP]の文脈に挿入されて、後から習得されている(例：Put that up. Put my toothbrush down. Put Grover on there.)。これを仮に「後習得仮説」と呼ぶ。

この意味での「後習得」が事実だとすれば、put 等は一般的な語彙動詞の性質とは根本的に異なる性質を持つことがわかる。一般的な語彙動詞は統語・意味の中心として句の主要部となり項に意味役割を与える。ところが put の場合、すでに意味は PP が（事実上主要な）述部となって意味上の主語（統語的には put の目的語）と結びつき put はその点で何もしていないか、または「使役」という意味を付け加えているに過ぎない。つまり、習得する段階ですでに意味的に弱いのであり、この習得過程の特徴から上述(1-4)の特徴が導かれるものとして説明できるという重要な可能性が見えてくる。これは検証・確認に値する。

２．研究の目的

日本語の動詞「置く」(「得る」、「取る」）等が非常に特定的な意味を持つ一般的な語彙動詞であるのに対して、対応する英語の put（get, take）等が多様な意味を表し柔軟な特性を示す意味的弱動詞であるのはなぜか？この問いに対して、理論的な解答を提示することが本研究の目的である。そのために、この二つの言語には、関連する習得過程に重要な違いがあることを CHILDES（幼児言語データ交換システム）等の習得過程のデータベースや文献を調査して明らかにし、put 等が意味的弱動詞であることが、英語の習得過程の自然な帰結として導かれることを主張する。さらに、この分析にはその他数多くの利点があることを明らかにして妥当性を強化するとともに、習得過程を考慮する（process-oriented）アプローチの支持になることも示したい。

３．研究の方法

本研究の方法・作業は大きく分けて２つからなる。第一に、後習得仮説を英語と日本語の習得事実に基づき検証することである。これが最も時間と労力を必要とするので、一定期間を設け必要な準備をし、十分時間をかけて CHILDES を中心に調査を行う。第二に、後習得仮説に基づいて意味的弱動詞の特性を説明する明示的な理論的分析の提示である。理論的説明の構築に関しては、土台とする process-oriented な枠組みと PP、小節などの関連分野についてさらに知識を深めつつ、分析の精緻化を目指し、可能な範囲で応用を試みる。

４．研究成果

本研究は英語における後習得仮説を支持するとともに、数多くの成果をあげた。わかった点を 6 つ上げる。

(1) PathPP は、獲得最初期から動詞なしで頻出し、述語として位置変化を表す。関連発話の大半は物を移動させてという依頼で、使役が潜在する。動詞は後から現れ、意味的弱動詞 put, take, turn 等から始まるが、位置変化の意味には貢献しない。本成果は英語における後習得仮説を支持し、したがって「背景」であげた英語の意味的弱動詞の 4 つの特徴もそこで述べたとおりに導けることを示した。

(2) 獲得初期の PathP の大多数が telic である（in, on, off など）。atelic の around, along などは多くなく、現れる場合も（単独）述語としてではなく、動詞と共起して副詞的に使われる。

(3) 動詞の出現は、潜在的使役の意味を形式化する発達ステップが一因と考えられる。意味的弱動詞に続いて、様態動詞が増え（pull it away, throw it down, wipe it off, rub it out）、さらに、need, want が現れる。これらの例において P が動詞と複合述語を構成するとは考えにくく、P が一人前の述語でないと成立しない例である。

(4) light v＋PathPP の獲得過程は、Levin and Rapoport (1988)の Lexical Subordination と Talmy (1985 他)の satellite-framing of Path を説明する可能性がある(Suzuki 2017)。

(5) 日本語の場所・経路は獲得最初期から動詞で表されることを確認(Suzuki 2004)。予想通り日本語は後習得仮説を守っていないことが示された。はじめに動詞が経路を表す述語として設定されるとそのまま verb-framed language となると考えられる。

(6) 関連する V-Prt-DP (句動詞構文) について。①獲得初期にはほとんど現れない。②この構文には V-DP-Prt に頻出する動詞 take, put, pull, turn がほとんど現れない。獲得初期の段階では２つの構文は意外なほど異なる特徴を持ち、別々の出現理由を持つと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木 猛	４．巻 90
２．論文標題 英語の経路前置詞句の周辺	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本英文学会第90回大会Proceedings（付2017年度支部大会Proceedings）	６．最初と最後の頁 213-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takeru Suzuki	４．巻 34
２．論文標題 Root PathPP Small Clauses in English: Developmental Origins of Path-Related Constructions	５．発行年 2017年
３．雑誌名 JELS	６．最初と最後の頁 179-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takeru Suzuki	４．巻 36
２．論文標題 Reinhart, Tanya (2016) Concepts, Syntax and Their Interface: The Theta System	５．発行年 2019年
３．雑誌名 English Linguistics	６．最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鈴木　猛
２．発表標題 英語の経路前置詞句とその周辺
３．学会等名 日本英文学会中部支部第６９回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Takeru Suzuki
２．発表標題 Root PathPP Small Clauses in English: Developmental Origins of Path-Related Constructions
３．学会等名 日本英語学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考